

研究成果の紹介

1 「ふくほのか」の醸造用小麦生産に向けた施肥技術

ねらいと成果

従来、兵庫県の小麦品種は「シロガネコムギ」で小麦粉用として生産されてきた。ところが、近年、地場産小麦を使用して、しょうゆの醸造が行われるようになった。しょうゆ生産のための醸造用小麦は、粒張りが良く、タンパク質含有率が12%以上と非常に高いレベルを求められるため、実肥施用が必須条件となっており、「シロガネコムギ」では出穂10日後に10a当たり硫酸を20～30kg施用している。

一方、2007年から奨励品種となった「ふくほのか」は、「シロガネコムギ」と比較して、製麺適性が良好で、多収であるが、醸造用小麦としての適性は検討されていなかった。そこで、本試験では「ふくほのか」の醸造用高タンパク麦生産のための実肥施用量について検討し、出穂10日後に10a当たり硫酸を30kg程度施用することで、醸造用小麦生産が可能であることを明らかにした。

内容

小麦奨励品種である「シロガネコムギ」と「ふくほのか」を用い、2004～2006年に施肥試験を行った。高度化成を10a当たり窒素成分で基肥に6kg、追肥として1月下旬、2月下旬～3月初旬にそれぞれ2kg、3kg施用し、実肥として4kgを出穂10日後に施用する区と出穂10日後と20日後に2kgずつ分施する区を設けた。なお、2006年

には出穂10日後に6kg施用する区を加えた。

その結果、「ふくほのか」は「シロガネコムギ」と比較して、千粒重が大きく、収量も多かった(表)。ただし、「ふくほのか」のほうが倒伏しやすく、多肥栽培では注意が必要と考えられた。

収量、千粒重及びタンパク質含有率は、実肥を施用すると両品種とも増加した。また、実肥の施用方法では、施肥総量が4kgと同じであれば、2回に分施するより出穂10日後に一括して施用するほうがタンパク質含有率はやや高くなり、作業性からみても一括施用で良いと考えられた。

しかしながら、「ふくほのか」は平均では醸造用小麦の基準である12%を満たしているものの、年次によっては12%を若干下回る場合がみられた。そこで、実肥を10a当たり窒素成分で6kg(硫酸で約30kgに相当)と増量したところ、タンパク質含有率は1%以上向上して13%台となり(図)、高品質醸造用小麦を生産することが可能となった。

今後の方針

同様の試験を現地でも行っており、麦踏みで倒伏軽減を図りながら、「シロガネコムギ」より収量性の高い「ふくほのか」に切り替えて、収益性の向上を図っていく。

岩井 正志 (農業技セ 作物・経営機械部)
(問い合わせ先 電話: 0790-47-2410)

表 実肥施用が小麦の収量及び品質に及ぼす影響(04～06年平均)

品種名	実肥N		精子実重 kg/10a	収量比 (実肥なし) %	千粒重 g	タンパク 質 %
	I kg/10a	II kg/10a				
シロガネコムギ	0	0	386	100	33.2	9.7
	4	0	469	123	35.8	12.6
	2	2	420	109	35.1	11.8
ふくほのか	0	0	508	100	35.5	9.1
	4	0	644	129	38.6	12.3
	2	2	616	123	37.3	11.7

(注)1 実肥 I は出穂10日後、実肥 II は出穂20日後施用。

2 千粒重及びタンパク質は水分12.5%換算。

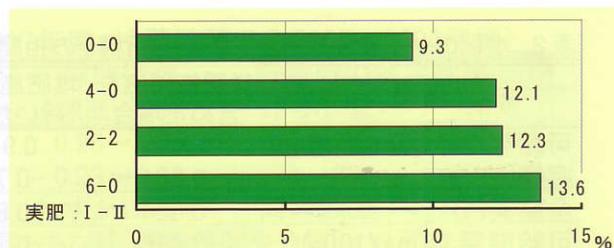


図 実肥の施用量が「ふくほのか」のタンパク質含有率に及ぼす影響
(注) 実肥 I : 出穂10日後、II : 出穂20日後、単位は窒素成分kg/10a